

《ロマンス諸語初出文献紹介》

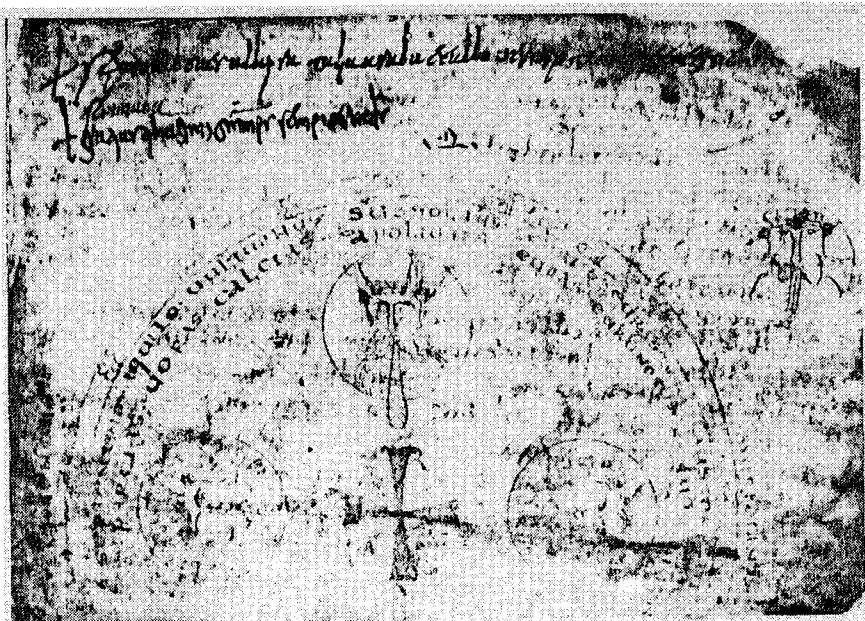
『ヴェローナの謎』と『カプアの判決文』

菅田 茂 昭

ラテン語の故郷となったイタリアでは、古典ラテン語と中世ラテン語が根強い勢力を保っていたため、民衆の書きことばとしてのイタリア語、いわゆる *volgare* の誕生は遅れるかにみえたが、すでにその走りが 800 年頃には現われる。『ヴェローナの謎』と名付けられている、もはやラテン語とは見做されないが、しかもイタリア語とも言い切れない、断片である。したがって一般にイタリア語の最古の文献として認められるのは、960 年春にさかのぼる『カプアの判決文』のなかにそのまま記録された証言である。ここではこの二点を初出文献としてとりあげてみたい。前者はヴェローナの司祭会図書館に、後者はモンテカッシーノのベネディクト修道院の古文書館にという具合に教会の手厚い保存に負うものである。もちろんイタリア語の初出文献とはいえ、当時ラテン語のほか統一された書きことばはまだ存在せず、一方はヴェローナ方言にて、他方はカンパーニア方言にて綴られているにすぎない。

Indovinello veronese (ヴェローナの謎)

8世紀の初め頃トリードにて書かれた *mozarabico* の祈禱書が、カリアリ、ピサを経てヴェローナにもたらされ、そこでこんにちまで伝わることとなったが、その3フォリオ版表の上部に(下図参照)、おそらく8世紀末か9世紀初めのこと、この地方のことばで2行にわたり悪戯書きされている。



L'indovinello veronese
Bibl. Capitolare di Verona, cod. LXXXIX.

単語を区切ると次のように書き直される。

+se pareba boves alba pratalia araba & albo versorio teneba & negro semen seminaba

(+gratias tibi agimus omnip(oten)s sempiternae d(eu)s)

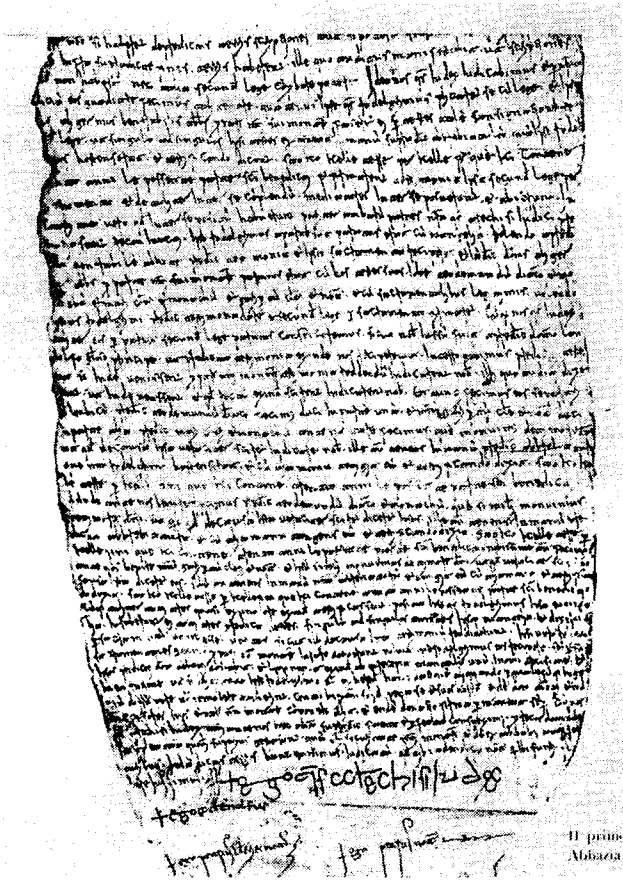
地方語の部分は現代語にすれば《Si spingeva avanti i buoi, arava un campo bianco e teneva un aratro bianco e seminava seme nero》、すなわち「牛を追ひ、白い畑地を耕し、白い鋤を持ち、黒い種子を播く」となる。原文の解釈であるが、これを4行詩、すなわち-eba, -aba, -eba, -abaと配列してABAB型、あるいは-eba, -eba, -aba, -abaの順にAABB型とする学者もあったが、一般には単なる「謎」の意に解される。boves (i buoi)「牛」は「指」を、alba pratalia (un campo bianco)「白い畑地」は「白い紙」を、albo versorio(un aratro bianco)「白い鋤」は「驚ペン」を、negro semen (seme negro)「黒い種子」は「インク」を暗示し、したがって落書きの主人公が浮かび上がるのである。boves「牛」を「指」の意のほか、「書き手」「手」、「ペン」などとする提案もなされているが、原文の意図するところに変わりはない。

原文の言語については、これを崩れたラテン語、完全に土語、あるいはその中間と学者によりさまざまに受取られているが、原文のなかの①対格の-mの脱落と語末の-oの存在(例, album > albo), ②アクセントのあるi > e(例, nigrum > negro), ③動詞の語末-tの脱落(例, tenebat > teneba)など文法的レベルではそのロマンス語性を示している。一方④sibi > se, ⑤「鋤」に対してaratumではなくversorio (versorium)を、「畑地」にagrumではなく, pratum > pratalia, ⑥parere (<parare「調達する」)はこの形式自体北イタリア的であるが、「(牛を)追う」意に用いるのはむしろこの地の民衆語においてであることに注目したい。ある学者は記号&の当時まれな使用も地域的現象のひとつとしている。またbovesの-sもラディン語圏に接触したヴェローナにおいては可能な形式と見做しうる。「白い」の意味でまだゲルマン系のblankが普及せずalbusが用いられているところに語彙のレベルでのラテン語性を見出そうとする試みもラディン語との接触を考慮するときその説得力を弱めることになる。prataliaの-t-, tenebaの-b-, semenの-nなどにわずかにラテン語性がうかがえるが、作者の教養ある筆のなせる業と敢えて考えれば、全体としてラテン語とは違ったことばという作者の意識を十分くみとることができよう。しかしW.D.Elcockの“glimpse of Romance but little more”という戒めに従ってイタリア語性を強調することはさし控えた方がよいかも知れない。

Placito di Capua (カプアの判決文)

俗語がラテン語に対比して意識的に用いられたことから、はっきりとイタリア語の最古の文献と認められるのは960年春にさかのぼるこのカプアの裁判の記録である。ローマから鉄道だとカッシーノ支線で138キロ南下したところに592年聖ベネディクトにより設立されたモンテカッシーノ修道院がある。960年春、おそらく3月17日から31日にかけてと推定されるが、Arechisi裁判官のもとにモンテカッシーノの修道院長Aligernoがその弁護士を伴って、約2万ヘクタールの土地をめぐる教会側を訴えた平信徒Rodergrimoと争った裁判の結着がラテン語で記録されている。そのなかに書記が教会を弁護する

証人の証言の部分を俗語のままに忠実に記している（写真参照）。この証言に対してこの裁判は、原告 Rodergrimo が証人を立てることができず敗訴するという結末であるが、教会



Il primo dei piacti cassinesi: Capua, marzo 960
Abbazia di Montecassino, Arch., cap. XXXI.

側の証言は、印刷体に直すと次のように示される。

Sao ko kelle terre, per kelle fini que ki contene, trenta
anni le possette parte S(an)c(t)i Benedicti

これが原文では形を変えずにさらに3回くり返されている。現代語訳は《So che quelle terre, per quei confini che qui(si)contiene, trenta anni le possedette la parte(cioè il Monastero)di san Benedetto》。すなわち、「私はここに示される範囲のその土地は30年間聖ベネディクト側が所有したことを知っている。」との意であり、この裁判は当時の慣習により教会側が完全に勝訴している。こんにち残念ながら多くの学者の努力にもかかわらず具体的に争われた土地を特定することはできない。

この証言の言語については、イタリア語というよりカンパーニアの土語としての色彩が濃

い。まず発音に関しては、とりわけ P. Fiorelli (1964) による当時の発音を再生する試みが注目される。

[Sao kko kkele terre, pe kkele fini ke kki kkondène, trend'anni le possète parte sandi *βenebitti*]

原文の表記は当時の発音にかなり忠実という結論である。sao kko における2重子音化の現象は sa (<* sat) kko からの単なる影響であろうか。表記 nt の実際の発音が nd となるのはこの地方の一般的な傾向である。形態にかかわるが ku > k によりトスカーナの quelle 「それらの」に対して kelle が、同様に qui 「ここに」 (< eccu + hic) に対して ki がみられるのもこの地方の特徴に帰せられる。議論されるのは最初の単語 sao 「私は知っている」 (< sapere) である。トスカーナの so または sappo に対して南イタリアで用いられるべき saccio の代りに、なぜこの形式が用いられたかである。一般には法律用語として証言の場において広く用いられていたためと解釈され、そしてこの意味でイタリア語の統一として記録に残る最初の具体例とさえいわれる。

その他の形態については、ko (< quod), que ki contene の contene については E. Coseriu ほかに多くの学者が議論しているが、「ここに〔メモに〕示され(描かれ)ている」の意に解されている。kelle terre …… le posette においては代名詞 le 「それらを」を伴う予弁法に注目すればよい。posette 「所有した」は possedette の -d- の消失(カンパーニア・ラチオ地方の古い傾向)、あるいはむしろ possedde (<* posseduit) の edde が -ette にとって代わったものであろう。さいごにラテン語性を示す属格を伴う pars については、当時財産その他の所有者を示すための用法であるとすれば俗語文のなかにみられることも予測しうることであろう。

[後記] 以上は日本ロマンス語学会第16回大会における簡略な紹介である。これらのテキストは細部にわたり多くの学者が十分に検討している。そのなかでもことに A. Castellani, *I più antichi testi italiani*, Bologna 1976 を参考までにあげておきたい。